



3. 11東日本大震災・原発事故の体験 35 その2

被曝を覚悟で浪江町各地点の放射線量を測定

双葉郡浪江町(元浪江町職員・郡山市に避難中) 屋中茂夫さん(61歳・本会会員)

<No235 屋中さんの体験 その①の要旨>

私は双葉郡浪江町職員として教育委員会事務局で、あの震災発生時から小・中学生の避難の対応や学校再開などに追われました。

【放射線量の計測調査について】

夏場のタイベックスでの作業は過酷
10キロ圏内の高放射線量危険地帯へ

私は、「学校再開が復興への第一歩である」という馬場町長の基本姿勢により、教育支援班と災害対策班の合同で、町内の学校施設を中心に17カ所の放射線量を調査。原発事故直後の平成23年6月17日から、毎週金曜日に町内に立ち入りし調査してきました。第一原発から約10キロ以内で、もちろん放射線量は大変高く、危険な地帯です。

タイベックス(防護服)とマスク、靴カバーを着用し、被ばく線量計測器を身に付け、シンチレーション式空間線量計を持参し、町内に入りました。全面マスクの内側は、呼吸でメガネが曇り視界不良。タイベックスは通気性が悪く、全身が汗でビショリ。特に夏場の作業は過酷でした。食事摂らずに帰庁することも度々ありました。

「毎時80μSv」の数字に気分が悪くなる

計測は、阿武隈山地の津島地区の津島支所から始まり、津島小学校、津島中学校、浪江高校津島

分校、赤宇木柵平地内へ。屋曾根地内の空間線量は、地上1mで毎時20~30マイクロシーベルト。大堀地区の小丸集会所前では地上1mで毎時30~50マイクロシーベルトを計測し、地上1cmでは毎時80マイクロシーベルトを計測。この数字を見ただけで気分が悪くなりました。

◀ 2011年9月8日
『朝日新聞』
写真中央が屋中さん



福島第一原発から約6kmの請戸小学校で、放射線量を測る浪江町職員=2日午後、福島県浪江町、河合博司撮影

「陶芸の杜おおほり」の駐車場でも、地上1mで毎時20~40マイクロシーベルトを計測しました。

私が想定する放射線の流れの方向は、双葉町の西、石熊から双葉バラ園、浪江町井手地区、大堀の陶芸の杜から小丸、国道114号線の大柿ダム上空から津島赤宇木地区、手七郎地内からさらに飯館村へと拡散していったものと思います。

【自分の健康管理について】

警戒・避難区域に31回の立入調査

放射能は五感で感じることができず、どれだけ浴びても熱や痛み等が伴わないので、被ばくの程度を自覚することができません。

私は被災後、生活が少し落ち着くと、自分自身の「外部被ばく・内部被ばく」が心配になり、ホールボディ検査を希望しました。

私の場合、平成23年度中に浪江町の警戒区域、計画的避難区域に一時立ち入りした回数は31回、滞在延べ時間は161時間にもなります。当然内部被ばくが心配なので、平成23年11月7日福島県平田村にある医療機関・ひらたクリニックでホールボディカウンター・WBCを受診しました。結果は、経過観察で3ヶ月後に再検査となりました。

- ・セシウム134は1,202ベクレル(今回の検査における検出限界は250ベクレル)

- ・セシウム137は1508ベクレル(今回の検査における検出限界は300ベクレル)

体内にある放射性物質から、概ね一生(成人では50年間)に受けると思われる線量の「預託実効線量」は0.26ミリシーベルトと推定されました。

平成24年度から浪江町津島診療所に、ホールボディカウンター・WBC検査機器が導入されたので、平成24年6月6日にそこで再検査したところ、

- ・セシウム134は177ベクレル(今回の検査における検出限界は180ベクレル)

- ・セシウム137は240ベクレル(今回の検査における検出限界は240ベクレル)

再検査で、体内にある放射性物質から、概ね一生(成人では50年間)に受けると思われる線量の「預託実効線量」は1ミリシーベルト未満と推定されました。

(裏面に続く)

戦争体験・震災体験をお寄せください!
記録として残さないと、忘れてしまいます!
忘れ去られてしまいます!

一方、外部被ばくについては、平成23年3月1日から7月9日までの行動記録を福島県立医科大学へ提出し、この間に受けたと推定される外部被ばく実効線量を推計していただきました。それによると「およそ2.9ミリシーベルト」という結果が出ました。

この数値は、胸のX線検査1回当たり0.05ミリシーベルト、胸部のコンピュータ、CTスキャン1回当たり6.9ミリシーベルト、胃のX線精密検査1回当たり0.6ミリシーベルト、日本の平均一人当たりの自然放射線年間1.5ミリシーベルト、世界の平均一人当たりの自然放射線年間2.4ミリシーベルトですから、決して低い数値とは言えません。

東京電力福島第一原子力発電所爆発から8ヶ月後の検査ですから、ヨウ素131（半減期8日）、ストロンチウム89（半減期50.5日）等は低減化しているでしょうが、セシウム134（半減期2.1年）、セシウム137（半減期30年）、プルトニウム（半減期14年から約24,000年）は自然界からなくなる恐ろしさを知識として持つ必要があります。

机上での判断での区域指定 低線量で警戒区域、高線量が計画的避難区域に

前記のように、私は原発事故直後の6月17日から毎週金曜日、浪江町内に立ち入り線量調査をしてきました。その中で原発の水素爆発により、浪江町の市街区域が「警戒区域」に、山間区域が「計画的避難区域」に国が指定し、行動も厳しく制限されました。しかし線量調査の中で考えさせられたのは、原発から20km圏内が厳しく制限され「警戒区域」に、20km圏外は立ち入りがある程度緩和され「計画的避難区域」に指定されていることです。要するに、低線量区域が警戒区域に指定され、高線量区域が計画的避難区域に指定されています。これは全く机上での判断としか言いようがありません。きちっとモニタリング調査をしてから判断すべきではなかったかと思えます。

以上、震災、原発事故後の体験記録です。

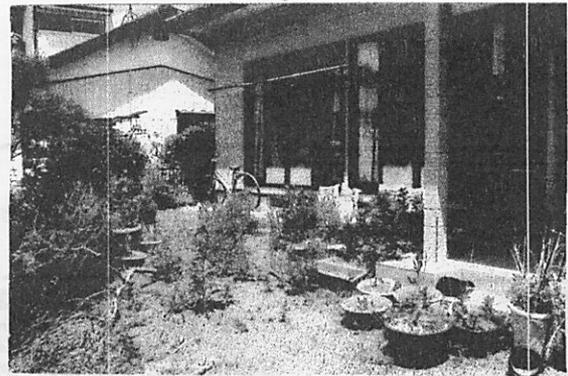
【現状について】

脱原発と核兵器の放棄を願う

未だに約15万人の福島県民が避難生活を強いられ、原発事故関連死も1,625人に達しています。原発敷地内では、毎日のようにトラブルが発生し、放射性物質の汚染水は毎日400トンも発生し増え続け、事実上破綻している状況です。

県民意識調査では、原発再稼働・原発推進は約7割が反対で、福島第一・第二原発について「廃炉にすべき」も約7割強だったのに、夏の参議院選挙では、「原発にハッキリ意思表示せず」の自民党の候補者が当選しました。原発事故で甚大な被害をこうむった福島県民自身が「脱原発」の意思表示ができず、全く残念でなりません。

日本は、唯一の原爆被爆国であり未曾有の原発事故体験国として、原発依存からの脱却と核兵器の放棄を世界に発信すべきだと思っています。



▲浪江町の屋中さんの自宅。原発から北へ約10キロの「帰還困難区域」のため草ぼうぼうで荒れ放題。庭先の放射線量は毎時3.4マイクロシーベルトもあります。

【浪江町職員を退職後の私は】

2013年3月17日に郡山市に引っ越して、間もなく5ヶ月。6階建てのアパートに、私たちは2階に、3階には娘夫婦と孫が住んでおります。郡山市は生活には大変便利なところ。健康維持のため、午前中は約10キロの散歩をしています。

郡山市内の空間放射線量は、毎時0.08～0.2マイクロシーベルト程度。ちなみに浪江町の自宅は福島第一原発から約10キロですが、庭先で空間放射線量毎時3.4マイクロシーベルト、家の中でも毎時1.2マイクロシーベルト程度あります。JR常磐線沿線は数値が高く、線路の敷砂利や法面の草に放射能が浸透しています。浪江町役場周辺や浪江小学校周辺では毎時0.1～1.1マイクロシーベルト程度です。

【浪江町の復興について】

除染も廃棄物の処分場もなにも決まらず

浪江町の復興計画で「避難指示解除」は平成29年3月11日ですが、復興のためには、上・下水道の復旧、津波で破壊された下水道の終末処理場の復旧、住宅とその周辺の除染、田畑や住宅周辺20m周囲の山林の除染を急がなければなりません。

除染は極端な話、屋根瓦を1枚1枚布で拭き取り、壁も除染し、庭は表土5cm程度削り、新しい砂を入れます。庭木も伐採や剪定を。舗装道路は全て5cm程度削り取るか、洗浄します。水田もやはり5cm程度削り取り、土手は除草します。これらは全て国（環境省）が実施主体ですが、見通しは立っておりません。

こうして出た廃棄物は、中間貯蔵施設に30年間仮置きし、その後最終処分施設に永久貯蔵することになります。中間貯蔵施設も最終処分施設も、まだ決まっておらず、廃棄物はそれぞれの町で膨大な量を仮置きしている状況です。我が家の周囲は草ぼうぼう。他の家では、鼠、豚、猪などの動物被害で大変悲惨な状態です。

自宅に戻れるのは10年後か

避難中に、あの人もこの人もという状況で亡くなる方がおります。隣組では被災後4人も亡くなっています。自宅に戻れず、仮設住宅や借り上げ住宅で「浪江の自宅に死にたい」と言って亡くなっています。本当に悲しいことです。私の自宅付近が避難解除になるのは10年後、津島地区は20年後頃と私は予想しています。辛く、苦しい避難生活がまだまだ続きます。<2013年8月4日記>